



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.122
2013.11.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

阿玉台式土器

— 東関東に花開いた特異な中期縄文土器 —

塚本師也

第10回

阿玉台式土器の細分(4)

〈阿玉台Ⅲ式土器〉

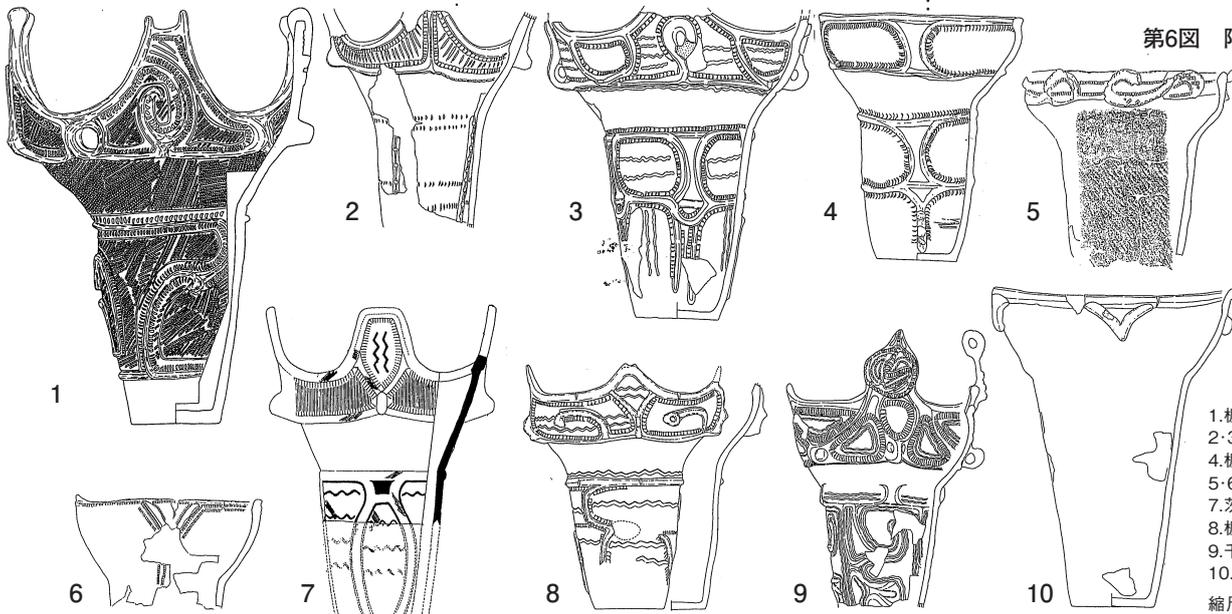
阿玉台Ⅲ式は隆帯に沿って幅広の爪形文を施す。阿玉台Ⅱ式の複列の角押文には、半截竹管の内側を器面に当てて押し引きするものがあるが、阿玉台Ⅲ式では竹管の背側を押し引きする。ほかに篋状工具も使う。中部・西関東地方の勝坂式土器は、新道式段階以降、盛んに所謂爪形文を用いるが、これを阿玉台Ⅲ式が受容したと思われる。大村裕は、阿玉台式土器の爪形文が押し引きによって施文するのに対し、勝坂式土器では、工具を器面に連続押捺するとし、これを「キャピラー文」として区別した(大村1984)。

口縁部区画文、頸部素文帯、体部懸垂文の3帯構成、逆U字状(第6図7)や直線的(第6図2)な懸垂文、V字状突起(第6図6・10)、押し引き手法、平縁と波状縁を持つ

ことなど、Ib式以来の阿玉台式土器の伝統を受け継いでいる。しかし、阿玉台Ib~Ⅱ式土器にみられた多くの文様表出が消滅する。弧が向きを変えて縦に連なる懸垂文が新たに出現する(第6図1)。頸部素文帯に波状沈線を施すことは稀となる。隆帯の接点に円環状の突起が付くことがある(第6図8)。爪形文に併走する波状沈線(第6図9)や懸垂文下端を横位隆帯で区画する手法(第6図1)は、勝坂式の様構成、施文技法を受容・変容させたものと思われる。隆帯は太くなり、断面はカマボコ状を呈す。縄文の採用は、阿玉台Ib~Ⅱ式土器と異なる大きな特徴である。またこの時期に、大木式のS字状隆帯を取り入れ、口縁部の施文域に配した土器(第6図5)も出現する。

西村正衛は、阿玉台Ⅲ式は層位的に阿玉台Ⅱ式やⅣ式と明確に区別できないが、上

層にいたってⅡ式より量的に増大するという傾向を指摘した(西村1972)。その後、阿玉台Ⅲ式のみで構成される良好な一括資料の発見が相継ぎ、阿玉台Ⅲ式が年代的に独立することは検証された。阿玉台Ⅲ式の細別であるが、阿玉台Ⅱ式と伴出する古い段階の資料として千葉県大柏遺跡SI-087・090、阿玉台Ⅲ式のみを単独で出土する新しい段階の一括資料として茨城県大谷津A遺跡第65号住居跡、千葉県大柏遺跡SI-085等がある。阿玉台Ⅱ式と伴う古い段階の阿玉台Ⅲ式土器には、体部中に幅広い区画を1~2帯を配すものが見立つ(第6図3・4)。新しい段階の阿玉台Ⅲ式土器は、隆帯と爪形文が粗大化し、頂部が平坦もしくは丸味を帯びる大波状口縁の深鉢が目立つ(第6図1・7)。そして、この段階に地文の縄文を採用する(第6図1・5)。



第6図 阿玉台Ⅲ式土器

- 1. 栃木県湯坂遺跡
 - 2-3. 茨城県宮後遺跡
 - 4. 栃木県槻沢遺跡
 - 5-6. 茨城県大谷津A遺跡
 - 7. 茨城県村田貝塚
 - 8. 栃木県文谷地内
 - 9. 千葉県大松遺跡
 - 10. 茨城県堂平遺跡
- 縮尺: 1/10

【参考文献】

大村裕、1984、「所謂「角押文」と「キャピラー文」の違い」『下総考古学』7, 下総考古学研究会

西村正衛、1972、「阿玉台式土器編年の研究の概要—利根川下流域を中心として—」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第18輯、早稲田大学大学院文学研究科

【出典】

- 1. 大田原市教育委員会、1979、「湯坂遺跡」
- 2-3. 茨城県教育委員会、2002、「宮後遺跡1」
- 4. 西那須野町教育委員会、1980、「槻沢(つきのきざわ)遺跡」
- 5-6. 茨城県教育委員会、1985、「大谷津A遺跡」
- 7. 西村正衛、1981、「茨城県江戸崎町村田貝塚(第一次調査)—東部関東における縄文中・後期研究—その五」『早稲田大学教育学部学術研究』30号
- 8. 塚本師也、1984、「栃木県芳賀郡市貝町文谷出土の阿玉台式土器」『栃木県考古学会誌』第8集、栃木県考古学会
- 9. 千葉県教育振興財団、2011、「柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書4—柏市大松遺跡—縄文時代以降編1」
- 10. 茨城県教育委員会、2004、「堂東遺跡」

※巻頭連載は隔月です。次回は再び神村先生です。

目次

■阿玉台式土器	阿玉台式土器の細分(4)	塚本師也 …1	■リレーエッセイ	マイ・フェイバレット・サイト(第115回)	長屋幸二 …2
■考古学の履歴書	良き師・良き友に恵まれて(第12回)	渡辺 誠 …2	■考古学者の書棚	「鎮めとまじないの考古学(下)」	高橋 香 …3

考古学の履歴書

良き師・良き友に恵まれて(第12回)

渡辺 誠

13. 桑飼下遺跡で学ぶ

先生方・諸先輩からの恩恵ばかりでなく、考古学者としては遺跡の発掘から教えられることも多い。私にとって、先に記した川崎市初山遺跡や舞鶴市桑飼下遺跡は、その代表的な遺跡であり、思い出深い遺跡である。

桑飼下遺跡の重要性は、次の3点に集約される。第一は低地の自然堤防という立地条件であり、第二は植物遺体の豊富な泥炭層遺跡であること、第三は多量の打製石斧の出土により、縄文農耕論に大きな影響を与えたことである。これらを順不同で記す。

当時の縄文農耕論は、二つあった。藤森栄一先生による中部日本の中期農耕論と、賀川光夫先生による九州の晩期農耕論であるが、ともに農具とみなされた打製石斧が大きな比重を占めていた。これらは別々のテーマであると考えられていたし、今でもそう考えている人もいる。そしてお二人の先生には親しく御指導頂きながら、桑飼下遺跡と私の出した結論は否定的なものであった。

この遺跡は、両農耕論の舞台の中間の近畿地方に位置するばかりでなく、時期的にも縄文後期であり、その中間の時期に位置している。すなわちこのことによって、打製石斧は東から西へ伝わったことが明らかになったのであり、大陸から九州に伝わったのではなく、まして東日本への伝播は考えられないことになった。しかし藤森先生が中期農耕論を提唱した背景には、前期と中期の文化的落差があったのであり、農耕論の可否のみを論じることは、縄文研究にとって非生産的である。そして私なりの研究は、本遺跡の植物遺体の研究から導き出されている。

植物遺体の宝庫でもある本遺跡の泥炭層は、先にも記したように心無い学生達によって踏み荒らされていたが、これらはすべて平安博物館へトラックで運び、徹底的に水洗選別を行った。もちろん多かったのは殻の堅いトチやドングリ類であり、しかも並行して行った花粉分析ではトチは検出されず、遠隔地まで採集に行っていたことが明らかになった。ということは、同時に難しいアク抜き技術も獲得されていたことを明示している。

そして必然的に、堅果類のアク抜き技術についての民俗学的調査が重要視されてくることになった。民俗学的調査につ

いては後で詳しく記すが、植物遺体は京都大学理学部の池田次郎先生の下にいた西田正規氏に調査して頂いた。福井県の鳥浜貝塚の調査にも関係していて、貝塚や泥炭層遺跡についても心無い学生たちとは雲泥の差の深い理解をもっておられた。理学部には亀井節夫先生がおられ、前任地の新潟大学・信州大学におられた時に、江坂先生の使い走りでお目にかかったことを覚えておいて下さり、君も京都に来たのかと優しく頂いたのはありがたいことであった。

植物遺体自体の研究は、その後『古文化財科学会・考古学と自然科学』のなかの「生活と文化」の班に加えて頂き、大坂市立大学の粉川昭平先生に多くのことを教えて頂いた。そして縄文時代の食文化の研究へと展開したのである。

この班には奈良教育大学の嶋倉巳三郎先生もおられ、材の周定ではいろいろと教えて頂き、両先生や花粉分析担当の高知大学の中村 純先生とともに、佐賀県唐津市菜畑の調査に訪れ、その帰りに奥様方のお土産を置き忘れ、発車間際の電車にお届けしたのも、今では懐かしい思い出である。

それまでの縄文時代の食文化の研究といえば、貝塚の魚介類や骨類からのみ論じられ、極端な場合動物食の時代とされ、弥生時代の植物食時代とはギャップがあり、一段程度が劣るとさえ言う人もいた。しかしトチやドングリ類などの植物遺体の研究が進んだ結果、野生のものか、栽培されたものかの違いはあるものの、一貫して植物が主であるとみられるようになってきた。この意味で研究室のテーマである『日本文化の源流』にかなったものであった。

そしてトチやドングリ類などのアク抜きなどは、当時急速に展開した照葉樹林文化論のなかで、野生植物の高度利用段階と位置付けられ、藤森先生の意図はこのことによって達成されたと考えられる。当時闘病中だった先生がお元気であれば、さぞお喜びになったことと思う。

略歴

昭和13年11月18日 福島県平市大町(現いわき市)に生まれる
昭和32年3月 福島県立磐城高校卒業
昭和33年4月 慶應義塾大学文学部入学
昭和43年3月 同上大学院博士課程修了
昭和43年4月 古代学協会平安博物館勤務
昭和54年8月 名古屋大学文学部助教授
平成元年4月 同上教授
平成14年3月 同上定年退職、同上名誉教授
平成15年4月 山梨県立考古博物館々長・同埋文センター所長(18年3月まで)
平成18年7月 日本考古学協会副会長(平成22年5月まで)

隔月連載です。次回は石井則孝先生です。

リレーエッセイ

マイ・フェイス・サイト 115

日野遺跡・寺田遺跡 ～ 岐阜県岐阜市

長屋 幸二

岐阜市日野遺跡・寺田遺跡は旧石器時代を主とする遺跡です。濃尾平野の北端、四方を標高200m～300mほどの山に囲まれた盆地状の平地にあります。どちらの遺跡も沖積

地の中に島状に残った低位段丘面に乗っており、埋没谷を挟んで200mほど離れています。大きな声を出せば声の届く距離です。

昭和60年度(1985)、61年度(1986)には岐阜市教育委員会によって発掘調査が行われ、寺田遺跡では81基の礫群と66か所の遺物集中部、日野遺跡では63基の礫群と19か所の遺物集中部が設定され(吉田1987)、東海西部地域を代表する旧石器時代遺跡の一つとなっています。

発掘調査が行われたのは、ちょうど私が大学に入学した年でした。高校生のころから同級生に連れられて、その近隣で資料の地表面採集を行っていた私は、ぜひこの発掘調査に参加したいと思っていました。夏休みに帰郷すると、真っ先に自転車をとばして発掘現場へ行き、道場破りのように「発掘調査に参加させてください」と申し出ました。大学に入って3ヵ月、ほぼ初めての現場。やる気にはあふれていましたが、現場の右も左もわかりません。調査を担当された吉田英敏先生には何度も怒鳴られながら、休みのたびに現場・整理作業に参加させていただきました。卒業後も、東海西部の旧石器で一文书く際には、必ず立ち返る資料群となっています。

この資料群で特に注目されるのは、日野遺跡で確認された瀬戸内技法の接合資料です。盤状剥片の作出から翼状剥片の剥離、国府型ナイフ形石器の製作まですべての工程が復元でき、この遺跡内で一連の作業が完結していることがうかがわれます。

この接合資料には、板取系珪質溶結凝灰岩という石材が用いられています。この石材の原産地は日野遺跡・寺田遺跡よ

り直線距離で30kmほど北、長良川の支流板取川中流域にある阿部山です。珪質部分は溶結凝灰岩の一部にレンズ状に入り、岩脈としては大きくなさそうです。日野遺跡・寺田遺跡近くの長良川河川敷でも転石は得られますが、数時間探して鶏卵大以下の小さなものが1~2個拾える程度です。まとまった量を確実に得ようとすれば原産地近くまで行く必要があります。接合資料に用いられている石材は小児の頭ほどの大きさの垂円礫ですから、おそらく板取川中流域まで取りに行ったのでしょう。

板取系珪質溶結凝灰岩は、密度高く貝殻状断口の発達する良質の石器素材です。フレッシュな割れ面は光沢ある暗灰色をしています。風化すると珪質頁岩のような乳白色になります。当地域のチャート岩製石器の中では目を引く美しさです。しかし、縄文時代遺跡における当石材の利用頻度は低く、板取川流域でも剥片石器に占める割合は5%程度、板取川が長良川に合流する濃尾平野北縁辺りで3%、それより下流では1%に満たなくなります。旧石器時代資料のデータは限られますが、濃尾平野周辺では2%に満たない遺跡がほとんどです。当地域では、その良質さにもかかわらず、旧石器時代縄文時代を通じてマイナーな石材であったといえます。

しかし、その中であって、日野遺跡では剥片石器全体に占める割合が13.1%、「瀬戸内系ブロック」とされる石器群に限れば19.2%と際立って高い頻度で利用されています。国府型ナイフ形石器の素材としてこの石材を選択し、わざわざ原石を取りに行き、日野遺跡まで持ち込んで石器を製作したようです。(ちなみに、隣の寺田遺跡では6.3%です。)

このマイナーで美しい石材を選択し、取りに行ったのは当地域の石材環境に精通した者でしょう。しかし、この石材を用いて行われた石器製作は、当地域の石器製作伝統の中ではとらえられない瀬戸内技法一連のシステム(国府型ナイフ形石器を念頭においた定型的な素材剥片の剥離、素材剥片の作出を意図した石核素材の準備)が存在することから、瀬戸内地域の技術的性向を備えた者によると思われる。山形県越中山K遺跡や埼玉県殿山遺跡などの瀬戸内技法関連資料にも、その地域ではマイナーであるが美しい石材が用いられているようです。その地域の石材に精通した者が特別な石材を準備し、異なる石器技術を有する者が特別な方法で石器を製作する。ここに、異文化集団の邂逅の姿が映し出されているのかもしれない。

(参考文献) 吉田英敏編1987『寺田・日野1』岐阜市教育委員会

※今回のマイ・フェイバレット・サイトは小林康男さんです。



▲岐阜市日野遺跡・寺田遺跡位置図(大正9年地形図に加筆)

考古学者の書棚

「鎮めとまじないの考古学(下) -珍壇具からみる古代-」

森郁夫・藪中五百樹 著/雄山閣(2013)

高橋 香

「森先生、亡くならはったで。」

そんな内容だったかと思う。突然の1本の電話。いただいた電話の内容が一瞬理解できず、電話の主は何を言っている

のだらう、とわからなかった。心落ち着かせ、冷静に聞いてみるとどうやら突然の訃報の知らせの内容だった。今の今まで、元気であると信じて疑わなかった森郁夫先生が、どうやら3月

ぐらいから体調を崩され、入院していた事をその時初めて知らされた。

亡くなられてしばらくたったある日、手元に1冊の書籍が送られてきた。闘病生活に入られた森先生のその時に校正されていたといわれる書籍のうちの1冊であった。先生が何を伝えたかったのか少しでも理解したくて、気がつくと手に取り目を通していった。ここでは、そんな思いのある書籍を紹介してみたい。

本書の内容は、

はじめに

第一章 地鎮・鎮壇

第二章 神社の成立

第三章 生と死の鎮め

第四章 自然災害と鎮め

第五章 水と火の鎮め

第六章 末法思想への備え

おわりに

という構成である。

第一章では、「地鎮」とはいかなる行為であるか、についてふれている。どのような規模の建物であっても、その地にいる神の領域を侵す事を詫び、その加護によって工事の無事と未来永劫を祈って神を鎮める儀式・地鎮祭が行われる。一般的に大地を切り開き平坦にする際に「地鎮祭」が行われ、建物を建てる為に行われるのが「鎮壇」というが、考古学的に出土状況のみをみた上では両者は区別する事は困難であり、「地鎮・鎮壇」と併記している。そうした行為が古来より行われており、特に古代寺院等からは地鎮遺構を見る機会が多い。現存する寺院の中で、古来よりこの地鎮め行為をおこなってきた回数が多いのは興福寺で、遺構としては奈良時代2ヶ所、平安時代2ヶ所、鎌倉時代1ヶ所、江戸時代1ヶ所、明治時代1ヶ所、大正時代1ヶ所と各時代において行われ、それぞれ遺構として確認されている。興福寺は、建物が幾度となく焼失・再建を繰り返しているが、創建期の地鎮・鎮壇具が手つかずのまま埋納された状態が発掘調査で明らかにされており、この段階のものが残っていた事は奇跡的である、と著者は述べている。

第二章では、神社の成立について触れている。昨今、伊勢神宮や出雲大社など神社ブームであるが、神殿の成立についてはまだ謎が多い。「神社」の記載については『日本書記』の崇神天皇六年の記事がその初源とされているが、斉明天皇5(659)年に「出雲国造に命せて、神の宮を脩葺わしむ」とあり、社殿にまつられている神にふさわしいものをつくる、といった意味合いがある事から神社建築の造営があった事を伺わせる記事として紹介されている。神社の構造物については、弥生時代から見られる掘立柱建物址へとそのルーツをたどる事ができる。棟持ち柱建物跡は、弥生時代の大阪府池上曽根遺跡や奈良県唐古・鍵遺跡が、総柱建物址は群馬県鳥羽遺跡の建物址が著名であり、両建物址の形態は、神社建築の基礎となった構造物であった事は間違いのないだろう。

第三章では生と死の鎮めという内容で、胞衣の埋葬や火葬について書かれている。人間の誕生とともに生まれた胞衣は人間の成長を願って埋めるもので、近・現代まで行われていた行為である。子の成長を祈る親の姿が古代から行われていた事を、発掘調査事例をあげて紹介している。

第四・五章では自然災害と鎮め、水と火の鎮めについてふれており、自然現象といかに古代の人々が格闘してきたかが読み取れる内容である。『続日本紀』等をみていると、頻りに雨乞い等呪いについての記載が多い。その祈りの際に使用する道具として「絵馬」や「人面土器」等を形代として用いる。絵馬等の木製品を使用する呪いについては「律令祭祀」として認識される。この祭祀形態は地方にも伝播していくが、静岡県伊場遺跡や神奈川県七堂伽藍址の河道址等、郡衙関連の施設から出土する事が多い。第2節で地震についてかかれている。3年前の東日本大震災が起こった年に、貞観地震と同規模の地震で遺跡の発掘調査等から津波の範囲が明らかになっていた事等が話題になった。自然災害がおきた時、人はあまりにも無力でなすべがない、という事を思い知らされる。それでも「祈る」事で古代の人々は心の安穩を探していたのだろう。

最後章では末法思想の備えについて古代の人々がどうしてきたのかについてふれている。「末法思想」とは、自力では迷いや苦しみにから逃れる事ができない末法の時代がこれからくる、では私たちは何に救いを求めればよいのかと考えた時、阿弥陀如来と弥勒菩薩をその信仰の対象としよう、という思想で、平安時代半ば頃から流行する。末法の世に向かう世界での埋葬形態、つまり経塚であったり瓦経だったりなのだが、これらについてふれ、「おわりに」へと続く。

「おわりに」は、書籍を手にする事が叶わなかった森先生に代わり、著書とは別の方が執筆している。その中で森先生が「日本人が古来大切にしてきた先人たちの平穩を祈る思い、そして様々な悪鬼を祓い、神に祈った純粋な日本人の精神性を考古学に鑑みて記されました。」とある。平穩を祈る思いは古来より持ち続けられており、いろいろな面でそれを感じる事があるだろう。「祈り」という行為は、何らかの目的をもっている。出土した遺構・遺物から、こうした「祈り」を読み取り、可能な限り代弁していく事が、私たち考古学に携わる人間にとっての責務なのであろう。

なお、本書籍は上下セットになっており、関心のある方は「上」も是非目を通していただければと思う。

アルカ通信 No.122

発行日 2013年11月1日
 企画 角張淳一(故人)
 発行所 考古学研究所(株)アルカ
 〒384-0801 長野県小諸市甲49-15
 TEL 0267-25-0299
 aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp